

膳所城は、琵琶湖にかかる近江大橋の西側に位置しています。城下を南北に通る京阪電車石坂線では、膳所本町駅が最寄り駅となります。

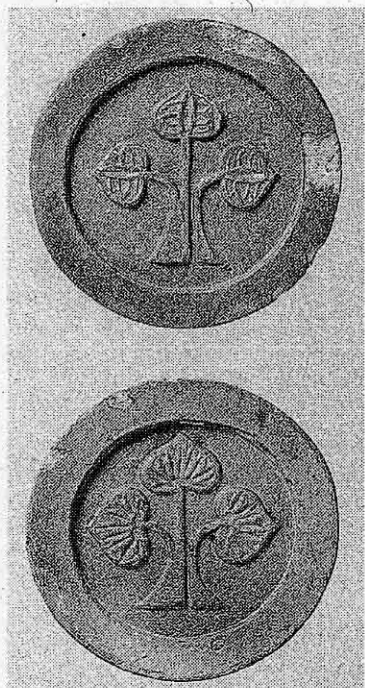
膳所城は、本丸などが琵琶湖に突き出る水城と呼ばれる構造で、その姿は「伊勢参宮名所図会」などの名所記にも紹介されており、4層の天守などが描かれています。湖面に浮かぶ美しい城といわれていました。明治3年(1870)に廃城となった

慶長5年(1600)、天下分け目の合戦として知られる関ヶ原の合戦が起こりました。この合戦に勝利した徳川家康は、戦後処理の一つとして大津城を廃し、膳所城を築城することを計画しました。慶長6年(1601)に大津城にいた戸田一西が3万石で入封し、築城が開始されました。城を移した理由を示す史料はありませんが、関ヶ原の合戦の前哨戦で大津城が周辺の山から攻められたように、地勢的に軍事面では弱い城であったため新たな拠点が必要となったなどと考えられています。結果として、交通の要衝であり商業的にも重要な場所であった大津に代わって、い

くつかの候補地から選ばれた膳所の地に新しい城下町が普請され、膳所藩が誕生しました。膳所城は、本丸などが琵琶湖に突き出る水城と呼ばれる構造で、その姿は「伊勢参宮名所図会」などの名所記にも紹介されており、4層の天守などが描かれています。湖面に浮かぶ美しい城といわれていました。明治3年(1870)に廃城となったときの本丸は、築城当初の本丸と二ノ丸が合わさったものです。現在は、堀は埋め立てられました。膳所公園として残る本丸はその面影を留めています。

## 湖南の「軍事拠点」膳所城

膳所城下町遺跡から出土した軒丸瓦。中央の文様は、本多家の家紋である立葵紋



大きく変更されることになったのです。

なお、廃城にもなっており、城下や草津市内の神社などに城門や櫓が移築されています。城下にある膳所神社、篠津神社、若宮八幡宮では、移築された城門を見ることができ

堂跡は、現在は県立膳所高校となり、教育の場として引き継がれています。その場所から、聖武天皇の禾津頓宮の大型建物が見つかったことは、記憶に新しいと思います。

一方、城下は城の西側に、東海道に沿って南北に長く形成されました。街道に面して町人町、その西側に武家町や社寺が広がっていました。なお、かつての藩校である遵義

城下を通る東海道は、見通せないよう幾度も屈曲するよう敷設され、城下への入り口となる大津口と瀬田口には番所と門が設けられました。京都や大阪から江戸へ向かうこの場所で、街道を抑えようとしたことがうかがえます。東海道を軸とする当時の街路

は、現在の街並みにも生き続けています。

膳所藩の初代藩主である戸田一西は、三河以来の譜代です。依然として軍事的脅威であった大阪に対し、信頼のおける家臣をこの地に置いたものとみられます。以降、19代18人の藩主が誕生しています。中でも本多家は、元和3年(1617)に入城した康俊以降最も多く藩主を務め、慶安4年(1651)に藩主となった俊次からは廃城時の康稷まで13代にわたり世襲します。当家の家紋である立葵紋を持つ瓦は、移築された城門の屋根などに見られるほか、城下で行われた発掘調査でも出土しています。このように東海道路筋に設けられた膳所城は、江戸時代を通じて多くの人の目に触れた城であり、軍事的に重要な場所に設けられた城であったといえます。(財団法人滋賀県文化財保護協会 中村智孝)

## 瓦が語る江戸時代の繁栄